



# 筑紫女学園大学リポジット

## Darkness and an Eye-disease Called timira

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 久泰, KOBAYASHI, Hisayasu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/88">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/88</a>

# 漆黒の暗闇のヴェール：ティミラ眼病との関わり

小林久泰

## Darkness and an Eye-disease Called *timira*

Hisayasu KOBAYASHI

### 0. 問題の所在

ティミラ眼病とは、インド哲学文献において頻出する眼の病気の一つである。とりわけ、外界非実在論を唱える仏教徒の一派、唯識学派にとって、この病気は自説を証明するため、極めて重要な意味を持つものであった。ティミラ眼病患者 (*timirika*) は、一般的に、実際には存在しないはずの毛髪のかたまり、蚊、ハエなどや二重の月を見られる。唯識学派は、ティミラ眼病患者に起こるこれらの症状を例に、我々の認識の生起はそれに対応する外在的基盤がなくとも説明が付くと主張するのである<sup>1</sup>。

*timira* という語は、サンスクリット語で元々「暗闇」を意味する。しかし、あまりにも眼病の一つとしての「ティミラ」やその特徴的な症状が有名となり過ぎたため、本来この語が持つ「暗闇」という語感、現代の仏教研究者たちの間で等閑視されてきたように思われる。そのため、ティミラ眼病が元来、完全失明 (*liṅganāśa*) へとつながる極めて恐るべき病気であることが十分に意識されてきたとは言い難い。

従って、本稿は、ティミラ眼病を正確に知る前段階として、*timira* という語が元々持つ「暗闇」という語感を明らかにすべく、その用例を提示することを目的とする。*timira* という語の用例を集めてみると、ジャイナ教文献や仏教文献の中に、非常に興味深い複合語表現を見出すことができる。それは *tamas-timira-paṭala* という表現である。この表現は、様々な解釈の可能性を含みうるが、基本的には「漆黒の暗闇のヴェール (もしくは覆い)」とでも訳されよう。本稿では、特にこの *tamas-timira-paṭala* という表現に着目し、その複合語の解釈の可能性を検討していく。

## 1. tamas-timira-pañāla という複合語

はじめに、tamas-timira-pañāla という表現の用例のいくつかを挙げてみる。以下に示す通り、この表現は、仏教、ジャイナ教文献を中心としてジャンルを問わず様々な文献の中で用いられる。

まず、ジャイナ教白衣派の戒律文献である『ニシータ・バーシャ』(以下、NiBh)、及び、『プリハット・カルパ・バーシャ』(以下、BKbH) では、次のように言われている。

NiBh 2847 = BKbH 5581:

tamatimirapañālabhūo pāvaṃ ciṃṭei dīhasaṃsārī /  
pāvaṃ vavasitukāme (BKbH; -kāmo NiBh) pacchitte maggaṇā hoti //  
[Skt.: tamatimirapañālabhūto pāpaṃ cintayati dīrghasaṃsārī /  
pāpaṃ vyavasite prāyaścitte mārgaṇā bhavati //]

漆黒の暗闇の覆い (tamatimirapañāla/\*tamatimirapañāla) のような [修行者] は、長期間輪廻に留まる者であり、[[この在家信者の権威や生活を駄目にさせてやろう] という] 悪を考える。悪をなそうと決意した彼には、贖罪における追求がある。

また、仏伝文献のひとつ、『マハーヴァストゥ』(以下、MV) では、仏陀の息子ラーフラについて次のように言われている。

MV (vol. III, 271, 12-13):

tamatimirapañālamathanāṃ putraṃ buddhasya rāhulaṃ nāma /  
sarvāśravaprahīnaṃ vandatha śirasā ca manasā ca //

漆黒の暗闇の覆い (tamatimirapañāla) を滅し、あらゆる煩惱を取り除いた、ラーフラというブツダの息子に身も心も捧げて礼拝すべし。

さらに大乘仏教の論書、『シクシャー・サムツチャヤ』(以下、SiS) では、菩薩の資糧 (saṃbhāra) のひとつとして次のものを挙げています。

SiS X 192, 1-2: avidyāmohatamastimirapañālaparyavanaddhasya prajñācakṣurviśuddhiḥ /

無明や無知といった漆黒の暗闇の覆い (tamastimirapañāla) に覆われた者の智慧の眼をきれいにする。

便宜のため、それぞれの用例に見られる tamas-timira-pañāla という複合語に対して、「漆黒の暗闇の覆い」という訳を付しておいた。しかし、実際のところ、この複合語を解釈することは極めて困難である。

まず問題となるのは、複合語の中の tamas という語と timira という語が、それぞれ「闇」を意味する同義語であるという点である。インドの伝統的なサンスクリット同義語辞典である『アマラ・コーシャ』にも、次のように明言されている。

Amarakośa 1.9.3ab: andhakāro 'striyāṃ dhvāntaṃ tamisraṃ timiraṃ tamaḥ /

女性形以外の場合、andhakāra, dhvānta, tamisra, timira, tamaḥ は [同義であり、それぞれ「闇」を意味する]。

このように *tamas* という語と *timira* という語は同義語であるため、これら二つの語がどのような関係で結びついていると解釈すべきか判然としないのである。

このことに関連して、ひとつ興味深い事実を指摘しておきたい。冒頭に述べた「ティミラ眼病」について、インド三大医学論書のひとつである『アシュタ・アンガ・フリダヤ・サンヒター』（以下、AHS）には、本来 *timira* と表現すべきところを *tamas* と表現している箇所がある<sup>2</sup>。すなわち、「ティミラ眼病」を「タマス眼病」と呼んでいるのである。このことは、医学文献においても、*tamas* という語と *timira* という語が同義語であり、置き換え可能であると考えられていたことを示唆しよう。

さて、*tamas-timira-ṣaṭala* という複合語を解釈する上で、もうひとつ問題となるのは、「ヴェール」「覆い」「膜」<sup>3</sup>などを意味する *ṣaṭala* という語と他の語との関係である。現代日本においても日常的に「暗闇のヴェール」などという表現の使用が見られる。普段我々はあまり意識することがないが、このように「暗闇のヴェール」と表現する場合、そこには「暗闇＝ヴェール」という同格関係が想定されており、この表現は、サンスクリット文法では *Karmadhāraya* と呼ばれる複合語として理解される。しかし問題は、目下の場合、解釈が *Karmadhāraya* だけとは限らないということである。

例えば、インド仏教論理学者ダルマキールティは『ヴァーダ・ニヤーヤ』（以下、VN）という論理学書の末尾において、その著述意図を次のように述べている。

VN 68,10-13:

loke 'vidyātimiraṣaṭalallekhanas tattvadṛṣṭer vādanyāyaḥ parahitaratair eṣa sadbhiḥ praṇītaḥ / tattvālokaṃ timirayati taṃ durvidagdho jano ayaṃ tasmād yatnaḥ kṛta iha mayā tatsamujjvālanāya //3//

他者の幸福を喜ぶ正しい者たちは、世間の人々に対して、真実の理解 (*tattvadṛṣṭi*) についての無知 (*avidyā*) に他ならない暗闇 (*timira*) と覆い (*ṣaṭala*) を表し出すものとしてこの「ヴァーダ・ニヤーヤ」（論争の規則）を提示した。[しかし] 誤った考えを持つこの者 [ニヤーヤ学派など] が、その真実の光を陰らせている。従って、私はここでその [真実の光] を輝かせるために尽力した。

この引用の中で下線を付した *avidyātimiraṣaṭala* という表現について、註釈者シャーントラクシタは次のように解説する。

VNT 142, 17-18:

timiraṅ ca ṣaṭalaṅ ceti **timiraṣaṭalam** avidyaiva timiraṣaṭalam **avidyātimiraṣaṭalam** bhūtārthadarśanavibandhakatvāt /

*timiraṣaṭala* とは、[Dvandva 複合語で]「暗闇と覆い」を意味する。*avidyātimiraṣaṭala* とは、[*Karmadhāraya* 複合語で]「無知に他ならない暗闇と覆い」を意味する。何故なら、[それは] 真実の理解 (*bhūtārthadarśana*) を妨げるものであるから。

ここでシャーントラクシタは、*timira-ṣaṭala* という複合語を、「暗闇と覆い」という Dvandva、すなわち語が並列した複合語として理解すべきことを明言している。残念ながら、シャーントラ

クシタが何故、「暗闇の覆い」という Karmadhāraya 理解ではなく、「暗闇と覆い」という Dvandva 理解を提示したのか、その理由は明らかではない。しかし、このような解釈が存在する以上、tamas-timira と paṭala の複合語を Karmadhāraya としてではなく Dvandva として解釈する可能性も否定できないのである。

以上のように、tamas-timira-paṭala という複合語は様々な解釈の可能性を秘めており、その意味を確定することは極めて困難であると言わざるを得ない。

## 2. ジャイナ教徒ジナダーサによる解釈

それでは一体、tamas-timira-paṭala という複合語はどのように解釈されるべきなのか。次に、その解釈の可能性を考察するため、ジャイナ教徒ジナダーサによる『ニシータ・バーシャ・ヴィシェーシャ・チュールニ』（以下、NiBhVC）の理解を検討していく。

このジナダーサの註釈は、ジャイナ教白衣派の戒律という非常にマイナーな内容を扱っていること、サンスクリット語ではなくプラークリット語で著されていることなどから、現代の研究者にこれまでほぼ参照されることがなかった。しかし、管見の限り、この NiBhVC は tamas-timira-paṭala という複合語を詳細に扱った唯一の文献であり、目下の主題に対して有益な情報を提供してくれるものである。なお、これから扱うのは、先に挙げた NiBh 2847 に対する註釈部分である。NiBh の当該箇所は、遊行生活を行う修行者グループと遊行先の在家信者との間にトラブルが起こった場合、いかにそれに対処すべきかということを扱っており、言わば、ジャイナ教出家者の処世術のマニュアルという性格を持つ。そこに書かれている内容自体、極めて興味深いものであるが、当該の主題とは無関係であるので、本稿ではその内容には踏み込まない。

便宜のため、当該の NiBh 2847 を以下に再出しておく。

NiBh 2847 = BKbH 5581:

tamatimirapaḍalabhūo pāvaṃ ciṃṭei dīhasaṃsārī /  
pāvaṃ vavasitukāme (BKbH; -kāmo NiBh) pacchitte maggaṇā hoti //

[Skt.: tamatimirapaḍalabhūto pāpaṃ cintayati dīrghasaṃsārī /  
pāpaṃ vyavasite prāyaścitte mārgaṇā bhavati //]

漆黒の暗闇の覆い (tamatimirapaḍala/\*tamastimirapaḍala) のような [修行者] は、長期間輪廻に留まる者であり、[[この在家信者の権威や生活を駄目にさせてやろう] という] 悪を考える。悪をなそうと決意した彼には、贖罪における追求がある<sup>4</sup>。

### 2.1. 第一解釈：Dvandva

註釈者ジナダーサは、上記 NiBh 2847 中の tama-timira-paḍala という複合語について、三つの解釈の可能性を挙げる。彼はまず、第一の解釈を次のように提示する。

NiBhVC (3) 55, 23-26 on NiBh 2847: kaṇhacauddasīe rāo bhāsuraḍavvābhāvo **tamaṃ** bhaṇṇati. tammi ceva rāto jadā rayareṇudhūmadūmiyā bhavati, tadā **tamatimiram** bhaṇṇati. jadā puṇa tae ceva rātie rayāyiyā mehaduddiṇaṃ ca bhavati, tadā **tamatimirapaḍalam** bhaṇṇati. suṭṭhum

aṃdhakāraṃ. ṇa tatha puriso kiṃ ci pāsati. evaṃ puriso kasāyauddāeṇa tivvativvatarativvatameṇa **tamatimirapaḍalabhūto** bhāṇṇati. **bhūtaśabdaḥ** dravyāndhakārasādrśyopamyārthe draṣṭavyaḥ.

【第一解釈】月の黒分の第14日目 (kaṇhacauddasī/\*kr̥ṣṇacaturdaśī) の夜<sup>5</sup>に、光り輝くものの (bhāsuradavva/\*bhāsvaradravya) が存在しないことが「漆黒」(tama/\*tamas) とされる。そしてその同じ夜に、塵 (raya/\*rajas)、砂埃 (reṇu)、煙 (dhūma)、霧 (dhūmiyā/\*dhūmikā) がある場合、[その闇は]「漆黒と暗闇」(tamatimira/\*tamastimira) とされる。さらにその同じ夜に、塵などが[あり]、なおかつ、雲による悪天候 (mehaduddiṇa/\*meghadurdina) がある場合、[その闇は]「漆黒と暗闇と覆い」(tamatimirapaḍala/\*tamastimirapaḍala) とされる。すなわち、極めて暗い闇ということである。その[闇]の中では、人はいかなるものも見ることがない。それと同じように、強力な、より強力な、最も強力な (tivva-tivvata-tivvatama/\*tīvra-tīvrata-tīvatama) 煩惱 (kasāya/\*kaśāya) の生起により、[目が見えなくなっている]人が「漆黒と暗闇と覆いのような人」(tamatimirapaḍalabhūta/\*tamastimirapaḍalabhūta) とされる。bhūtaという語は、物体(人)(dravya)と闇との類似性 (sādrśya) に基づく比喩 (aupamya) の意味で理解されるべきである<sup>6</sup>。

ここでジナダーサは、tamas-timira-ḥāla という表現を Dvandva 複合語と理解し、「漆黒と暗闇と覆い」というように並列的に理解している。そして、ここで言う *tamas* と *timira* を単なる同義語とはならず、前者を「月のない夜に光が存在しないこと」、後者を「塵などの遮蔽物が存在すること」とそれぞれ理解している。また、*ḥāla* を「雲による覆い」と理解し、先の二つに加え、それら三つの条件が重なった場合の極めて暗い闇夜のことが *tamas-timira-ḥāla* という表現で意図されているとジナダーサは考えている。

## 2.2. 第二解釈：Karmadhāraya

続いて、ジナダーサは第二解釈を挙げる。

NiBhVC (3) 55, 27-29 on NiBh 2847: ahavā — tama eva (*em.*; evaṃ) timiraṃ **tamatimiram**, tamatimiram eva paḍalam **tamatimirapaḍalam**, aṃdhakāraṇiṣeṣam ity arthaḥ. teṇa uvamā kajjati teṇa **tamatimirapaḍalabhūto**. ihāpi **bhūtaśabdaḥ** upamārthe. yathā andhakāreṇa ṇa kiṃcid upalabhyate, evaṃ tīvrakaśāyodayān na cāritraguṇaḥ kaścid upalabhyate.

【第二解釈】*tamatimira*とは、[karmadhāraya 複合語で]「漆黒に他ならぬ暗闇」(TAMA EVA TIMIRAṀ) のことであり、[さらに]*tamatimirapaḍala*とは、[karmadhāraya 複合語で]「漆黒の暗闇に他ならぬ覆い」(tamatimiram eva paḍalam) のことである。特殊な闇という意味である。その[漆黒の暗闇の覆い]によって[ある人に]比喩 (uvamā/\*upamā) がなされる。従って、[その人が]「漆黒の暗闇の覆いのような人」(tamatimirapaḍalabhūta) [とされる]。この場合にも、*bhūta*という語は、比喩の意味で[理解されるべきである]。闇によっていかなるものも見られないのと同じように、強力な煩惱の生起によって、[正しい]行いによる功德 (cāritraguṇa) が[その人には]何も見えなくなっている[ということである]。

この第二解釈では、ジナダーサは、*tamas-timira-ṣaṭāla* という表現を *Karmadhāraya* 複合語と理解し、「漆黒の暗闇の覆い」、換言すれば、「漆黒である暗闇である覆い」と理解している。第一解釈とは異なり、それぞれの語が意図する具体的な内容がここでは示されていないが、何かしら「特殊な闇」が *tamas-timira-ṣaṭāla* という表現によって意図されているとジナダーサは考えている。

### 2.3. 第三解釈：眼病

さらにジナダーサは、第三の解釈の可能性も提示する。

NiBhVC (3) 55, 30-56, 3 on NiBh 2847: *ahavā — pittudayavikāreṇa ya davvacakḥiṃḍiyassa sabalīkaraṇaṃ timiraṃ bhaṇṇati. davviṃḍiyasabalabhāve ya daṃsaṇāvaraṇakammodao bhavati. siṃbhudayavikāreṇa ya davvacakḥiṃḍiyasaṃtar-aṇaṃ (em.; -ssaṃtaraṇaṃ) paḍalaṃ bhaṇṇati. tabbhāve ya cakkhudaṃsaṇāvaraṇodao. evaṃ timirapaḍalehiṃ purisassa tamo bhavati. na kiṃcit paśyatīty arthaḥ. teṇa uvamā jassa kajjati, so bhaṇṇati tamatimirapaḍalabhūto. ihāpi bhūtaśabdo upamārthe. yathāsau pumān daṃsaṇāvaraṇodayān na kiṃcit paśyati, evaṃ cāritrāvaraṇakaśayodayād iha paraloke hitaṃ na kiṃcit paśyati .*

【第3解釈】また、ピッタ (*pitta*) の生起に伴う変化によって、実体的視覚器官 (*davvacakḥiṃḍiya/\*dravyacakṣurindriya*) を斑点状に濁らされること (*sabalīkaraṇa/\*śabalīkaraṇa*) が「[眼の]混濁」(*timira*) と言われる。そして、実体感官が斑点状に濁ると、感覚を阻害する業 (*daṃsaṇāvaraṇakamma/\*darśanāvaraṇakarma* 見障業) の生起がある。他方、シュレーシュマン (*siṃbha/\*śleṣman*、カパ) の生起に伴う変化によって、実体的視覚器官に覆いがかけられること (*saṃtaraṇa/\*saṃstarāṇa*) が「[眼の]被覆」(*paḍala/\*ṣaṭāla*) と言われる。そしてその「被覆」があると、視覚を阻害する「業」(*cakkhudaṃsaṇāvaraṇa/\*cakṣurdarśanāvaraṇa*) の生起がある。以上のような場合、「[眼の]混濁と被覆の両者によって」人には「暗闇」(*tama/\*tamas*) が生じる。いかなるものも見ない、という意味である。その「眼の混濁と被覆による暗闇」によって、ある人に比喩がなされるが、その人が「[眼の]混濁と被覆による暗闇のような人」と言われる。この場合にも、*bhūta* という語は、比喩の意味で「理解されるべきである」。この人が感覚を阻害する「業」の生起によっていかなるものも見ないと同じように、「正しい」行い (*cāritra*) を阻害する煩惱の生起により、「彼は」この世で、来世の益 (*hita*) を全く見ない。

この第三解釈は、かなり特殊な解釈と言えよう。ここでジナダーサは、*timira-ṣaṭāla* という表現を *Dvandva* 複合語と理解し、前者を「混濁」すなわち「眼を斑点状に濁らされていること」、後者を「被覆」すなわち「眼に覆いがかけられていること」というようにそれぞれ眼病の症状として理解している。そして、それらの症状のせいで眼が見えなくなっていることを「暗闇」(*tamas*) と呼んでいる。複合語としては極めてイレギュラーなものであるが、この第三解釈に従えば、*tamas-timira-ṣaṭāla* という表現は「眼の混濁と被覆による暗闇」というように理解することができる。

因みに、インド医学論書では、一般的に、病気はヴァータ、ピッタ、カパという三つの病素 (*tridoṣa*) によって引き起こされると言われる。ティミラ眼病と一概に言っても、それにはヴァー

タ性のもの、ピッタ性のもの、カパ性のものなど、その病素に応じて様々な種類がある<sup>7</sup>。つまり、上記引用中に見られるように、ピッタのみがtimiraに関与するという訳ではない。このことから考えられるのは、ジナダーサがここで述べているtimiraとは、狭義の意味でのtimira、すなわち、瞳が斑点状に混濁するというティミラ眼病の症状のひとつでしかなく、ティミラ眼病一般という広い意味でのtimiraではないと考えられる。paṭalaについても、ここでは瞳に覆いがかかるという眼病の症状の一種と理解しておく方が無難であろう<sup>8</sup>。

但し、このジナダーサの眼病理解は、ジャイナ教独自の医学の伝統に則ったものである可能性も否定できない。それは医学をジャイナ教独自の業論と結びつけていることから考えられる。しかし、残念ながら、ジャイナ教において唯一現存する医学を専門に扱った文献『カルヤーナ・カーラカ』にも、このように眼病と業論を結びつける記述は見られない。

### 3. 結論

ジャイナ教や仏教の文献に見られるtamas-timira-paṭalaという表現は様々な解釈の可能性を持つ。本稿では、ジャイナ教白衣派ジナダーサの註釈に基づき、その解釈の可能性を検討した。その結果、彼がこの複合語を以下のように三通りに解釈していることが明らかとなった。

(1) Dvandva 解釈：「漆黒（闇夜）と暗闇（塵など）と覆い（雲）」(tamas + timira + paṭala)

(2) Karmadhāraya 解釈：「漆黒の暗闇の覆い」(tamas = timira = paṭala)

(3) 眼病解釈：「混濁 (timira) と被覆 (paṭala) による暗闇 (tamas)」(timira + paṭala → tamas)

このうち第三の解釈はtimiraをティミラ眼病、あるいはその症状として理解している点で、極めて独自なものと言える。このような解釈をジナダーサが持ち出すのは、彼が活躍した7世紀後半には、ジャイナ教においても、timiraという語が、本来の「暗闇」という語感に加え、眼病の一種としての「ティミラ」という語感も含み持つようになっていたことを端的に示していると言えよう。しかし、それでもなお、timiraという語は元々「暗闇」を意味することに変わりはなく、「眼病の一種」というニュアンスは副次的なものに過ぎないのである。

#### 【略号および参考文献】

- AHS Aṣṭāṅgahṛdayasaṃhitā (Vāgbhaṭa): *Aṣṭāṅgahṛdayasaṃhitā of Vāgbhaṭa, with the Commentaries Sarvāṅgasundarā of Aruṇadatta and Āyurvedarasāyana of Hemādri*. Anna Moreswar Kunte, Krishna Ramchandra Shastri Navre and Harishastri Paradkar Vaidya, eds. Krishnadas Ayurveda Series no. 4. Varanasi: Chowkhamba Krishnadas Academy, 1995. Reprint. (1st. ed. Bombay: Nirnaya Sāgar Press, 1939.)
- BKBh Bṛhatkalpabhāṣya (Saṅghadāsa): Willem B. Bollée (ed.), *Bhadrabāhu Bṛhat-kalpa-niryukti, and Saṅghadāsa Bṛhat-kalpa-bhāṣya*, Stuttgart: F. Steiner, 1998
- BKBhV Vṛtti on Bṛhatkalpabhāṣya (Kṣemakīrti): *Sthavira-Āryabhadrabāhusvāmipraṇītasvopajñāniryukty-upetaṃ Bṛhat Kalpasūtram / Śrīsaṅghadāsagaṇiṣṭhamaśramaṇasaṅkalitabhāṣyopabrṛhitam / Jaināgama-Prakaraṇādīyanekagranthātigūḍhārthaprakāṭanapraudhātīkāvidhānasamupalabdha-Samarthātīkā*

*āretikhyātibhiḥ Śrīmadbhir Malayagirisūribhiḥ Prārabdhayā Vṛddhapośālikatāpā-gacchīyaiḥ Śrīkṣemakīrtiyācāryaiḥ Pūrṇīkr̥tayā ca Vṛṭtyā Samalaḥkṛtam / Pañcamo Vibhāgaḥ, Śrī Ātmānanda Jainagrantharatnamālā no. 88, Bhavnagar: Śrī Jaina Ātmānandasabhā, 2002. (2nd edition.)*

- CS Carakasamhitā (Agniveśa): *The Carakasamhitā of Agniveśa, Revised by Charaka and Dṛḍhabala with the Āyurveda-Dīpikā Commentary of Chakrapāṇidatta*. Vaidya Jādavaji Trikamji Āchārya, ed. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., 1981. Reprint. (1st. ed. Bombay: Nirnaya Sāgar Press, 1941.)
- MV Mahāvastu: *Le Mahāvastu: Texte Sanscrit*. É. Senart, ed. 3 vol. Paris : Imprimerie Nationale, 1882-1897.
- NiBh Niśīthabhāṣya: Amarchand (ed.): Amarchand Ji (ed.), Varanasi, Amar Publications, 2005.
- NiBhVC Viśeṣacūrṇi on Niśīthabhāṣya (Jinadāsa). See NiBh.
- SiS Śikṣāsamuccaya (Āryadeva): *Çikshāsamuccaya : A Compendium of Buddhist Teaching*. C. Bendall, ed. Bibliotheca Buddhica I. Tokyo: Meicho-Fukyu-kai, 1977. (The 1st published in 1897-1902.)
- SS Suśrutasaṃhitā (Suśruta): *Suśrutasaṃhitā of Suśruta, with the Nibandhasaṃgraha Commentary of śrī Dalhaṇācārya and the Nyāyachandrikā Pañjikā of śrī Gayadāsācārya on Nīdānasthāna*. Vaidya Jādavaji Trikamji Ācārya and Nārayana Ram Ācārya, eds. Varanasi, Delhi: Chaukhamba Orientalia, 1992. 5th ed. (1st ed. Bombay: Nirnaya Sāgar Press, 1938.)

上村勝彦 (Kamimura, Katsuhiko)

[2002] 『原典訳 マハーバーラタ 6』ちくま学芸文庫

金沢 篤 (Kanazawa, Atsushi)

[1987] 「空華—ティミラ眼病との関わりで—」『仏教学』23: 29-56.

小林久泰 (Kobayashi, Hisayasu)

[2007] 「仏教認識論における錯覚論法」『印度学仏教学研究』55(2): 65-70.

Forthcoming ‘An Eye-disease Called *timira*.’ *Journal of Indian and Buddhist Studies* 61.

Meulenbeld, G. J.

[1999-2002] *A History of Indian Medical Literature*. 5 vols. Groningen: E. Forsten.

大地原誠玄 (Ohjihara, Jogen)

[1993] 『スシュルタ本集』第1巻・第2巻 谷口書店

定方 晟 (Sadakata, Akira)

[2011] 『インド宇宙論大全』春秋社

Sen, Madhu

[1975] *A Cultural Study of the Niśītha Cūrṇi*. Parshvanath Vidyashram Series No. 21. Amritsar: Sohanlal Jaindharma Pracharak Samiti.

Vogel, Claus

[1965] *Vāgbhaṭa's Aṣṭāṅgaḥṛdayasaṃhitā, The First Five Chapters of Its Tibetan Version*. Wiesbaden: Kommissionsverlag Franz Steiner GMBH.

矢野道雄 (Yano, Michio)

[1988] 『インド医学概論—チャラカ・サンヒター』(科学の名著)朝日出版社

<sup>1</sup> このような論法を西洋では「錯覚による論法」(Argument from Illusion)と呼ぶ。唯識学派の議論の詳細については、小林2007などを参照されたい。

<sup>2</sup> AHS 1.1.35以下にAHS全体の章を要約した箇所があるが、その中でAHS作者ヴァーグバタは *timira*

を扱った章のことを *tamas* と呼んでいる。AHS 1.1.46: *dr̥ktamoliṅganāṣeṣu trayo dvau dvau ca sarvagau / karṇanāsāmukhaśirovraṇe bhagne bhagaṃdare* // (「三つの [章] が瞳とタマスとリングナーシャに [当てられており]、それぞれ二つずつの [章] が、あらゆる [目の病気]、耳、鼻、口、頭、傷 [に当てられており]、[それぞれ一つずつの章が] 骨折、痔瘻に [当てられている]。)」)

- <sup>3</sup> ティミラ眼病の文脈で医学文献に出てくる場合、*paṭala* とは基本的に瞳 (*dr̥ṣṭi*) を構成する四つの「膜」を意味する。そして、最も内側の膜から外側の膜に病素が広がっていくことで、症状がより重篤になっていくとされる。詳しくは、金沢1987、及び、Kobayashi (forthcoming) を参照されたい。なお、*paṭala* 自体を眼に膜がかかる病気の一つとみなしていると思われる記述も医学文献には見られる。例えば、『チャラカ・サンヒター』(以下、CS) では次のように言われる。CS 6.26.252-253: *katakasya phalaṃ śaṅkhaḥ saindhavaṃ tryūṣaṇaṃ sitā / phenol rasāñjanaṃ kṣaudraṃ viḍaṅgāni manaḥsilā // kukkuṭāṇḍakapālāni vartireṣā vyapohati / timiraṃ paṭalaṃ kācaṃ malaṃ cāsu sukhāvati* //

- <sup>4</sup> NiBhVC (3) 56, 3-4 on NiBh 2847: *aiśvaryāy jīvitād vā bhraṃsanaṃ pāpam. taṃ tassa gihatthassa cīṃteti. tammi pāpa-vavasite pacchīṃte imā maggaṇā bhaṅṅti* // (「悪 (*pāpa*) とは、[相手の] 権威 (*aiśvarya*) や生活 (*jīvita*) を駄目にさせることである。[彼は] そのような [悪] をその在家信者に対して考える。悪をなそうと決意した彼には、贖罪 (*pacchīṃta*/\**prāyaścitta*) の際に次のような追求 (*maggaṇā*/\**mārgaṇā*) が言われるのである。)」)

NiBh に対応する BKBh に対してクシェーマキールティは『ヴリッティ』(BKBhV) を著しているが、そこで彼はジナダーサの NiBhVC のプラークリットをサンスクリットに書き直している。BKBhV (5) 1477, 23-25 on BKBh 5581: *evambhūtaś ceha paralokahitam apaśyan dīrghasamśārī tasya gr̥hasthasyopari ‘pāpam’ ‘aiśvaryād jīvitād vā bhraṃsaiśyāmi’ iti rūpaṃ cintayati. evaṃ ca pāpam kartuṃ vyavasite tasminniyaṃ prāyaścitte mārgaṇā bhavati* //5581// (「そしてそのような人が、ここで、来世の益 (*paralokahita*) を見ることなしに、「長期間輪廻に留まる者」(*dīrghasamśārīn*) [と言われる。][彼は] かの在家信者 (*gr̥hastha*) に対して「権威や生活を駄目にさせてやろう」というかたちの悪いこと (*pāpa*) を考える。そしてそのような悪をなそうと決意した彼には、贖罪 (*prāyaścitta*) の際に次のような追求 (*mārgaṇā*) がある。)」)

- <sup>5</sup> 例えば、『マハーバーラタ』(以下、MBh) に次のような記述がある。MBh 6.3.31: *māṃsavarṣaṃ punas tīvram āsīt kṛṣṇacaturdaśīm ardharaṭre mahāghoram atṛpyaṃs tatra rākṣasāḥ*. (上村2002: 26「また黒月(黒分)の第十四日目に、非常におぞましい激しい肉の雨が降る。真夜中に、羅刹たちはそれを飲んでも満ち足りることはない。)」なお、インドの時間単位については、定方2011: 82も参照のこと。

- <sup>6</sup> クシェーマキールティは次のようにこの NiBhVC をサンスクリットに書き換えるが、彼はジナダーサの第二、第三解釈を省略している点に注意が必要である。BKBhV (5) 1477, 19-23 on BKBh 5581: *kṛṣṇacaturdaśīrajanyāṃ bhāsvradravayābhāvas tama ucyate. tasyām eva ca rātrau yadā rajodhūmadhūmikā bhavati, tadā tamastimiram bhāṇyate. yadā punas tasyām eva rajanyāṃ rajaḥprabhṛtayo meghaduridinaṃ ca bhavati tadā tamastimirapaṭalam abhidhīyate. yathā tatraivāndhakāre puruṣaḥ kiñcid api na paśyati, evaṃ yas tīvatīvrataratīvratamena kaṣāyodayeṇāndhībhūtaḥ sa tamastimirapaṭalabhūto bhāṇyate, bhūtaśabdasyehopam ārthavācakatvāt*. (「月の黒分の第14日目 (*kṛṣṇacaturdaśī*) の夜に、光り輝くものが存在しないことが「漆黒」(*tamas*) と言われる。そしてその同じ夜に、塵 (*rajas*)、煙 (*dhūma*)、霧 (*dhūmikā*) がある場合、[その闇は]「漆黒と暗闇」(*tamastimira*) と言われる。さらに、その同じ夜に、塵などが [あり]、なおかつ、雲による悪天候があるとき、その場合、[その闇は]「漆黒と暗闇と覆い」(*tamastimirapaṭala*) と表現される。まさにその [「漆黒と暗闇と覆い」という] 闇の中では、人はいかなるものも見ることがない。それと同じように、強力な、より強力な、最も強力な (*tīvra-tīvratara-tīvratama*) 煩惱 (*kaṣāya*) の生起により、ある人が目が見えなくなっているならば、その人は「漆黒と暗闇と覆いのような人」

(tamastimirapaṭalabhūta)と言われる。何故なら、bhūtaという語は、この場合、比喻 (upamā) の意味を表示するものであるから。』)

<sup>7</sup> 例えば、SS 6.7.18cd-24などを参照されたい。

<sup>8</sup> 注3においても言及したが、paṭalaをtimiraとは別に独立した眼病の一種とみなしていると思われる記述がCSなどに見られる。但し、管見の限り、paṭalaという独立した眼病を詳しく解説した医学文献を見出し得ないため、それらCSなどにおいても、paṭalaという語で、ティミラ眼病やその他の眼病における「眼に膜がかかる」という症状を単に示している可能性が高いと思われる。

(こばやし ひさやす：人間文化研究所 リサーチアソシエイト)